

小学校における国際理解の視点を取り入れた ジェンダー教育の効果に関する研究

林原 慎 藤井 志保 宮里 智恵 伊藤 圭子
平川 幸子

1. はじめに

国連が推進する「持続発展教育 (ESD = Education for Sustainable Development)」は、「私たちとその子孫たちが、この地球で生きていくことを困難にするような問題について考え、立ち向かい、解決するための学び」であり、持続可能な開発の基盤となる価値観や行動の指針を広げるような教育である。具体的なテーマとしては、南北問題、環境問題、水資源、人権、ジェンダー、平和、貧困削減、HIV/AIDS問題など多岐にわたるが、一つ一つのテーマが個別の問題として存在するのではなく、いずれも文化的な背景のなかでの環境、社会、経済の複合された問題として取り組むことが求められている。持続発展教育は相互に複雑に関連しているこれら3つの領域に注目しながら進められており、きわめてホリスティック (全体論的) な概念によって成り立っている。

日本は、2002年8月に開催された「持続可能な開発に関する世界首脳会議 (ヨハネスブルグサミット)」において「ESDの10年」を提言し、これによって実施文書に「ESDの10年」が盛り込まれることとなった。これを契機に、続く2002年12月には、第57回国連総会本会議にて「ESDの10年」が採択され、2003年7月にはユネスコより「ESDの10年国際実施計画2005~2014」の草案が発表された。さらに、2004年10月の第59回国連総会にユネスコの「国連持続可能な開発のための教育の10年実施計画」最終案が提示されることとなった。当初、日本では「持続可能な開発のための教育」とも呼ばれていたが、現在は「持続発展教育」に統一されている。現在日本で展開されている持続発展教育を概観すると、環境教育、開発教育、国際理解教育の教育分野が大きな比重を占めており、それらと比較するとジェンダー教育からのアプローチは非常に少ない。しかしながら、本来の持続発展教育がめざしているものは、社会の課題と身近な暮らしを結び

つけ、新たな価値観や行動を生み出す学習や活動であり、包括的な概念として存在し続けるためには、先に述べたようにホリスティックなアプローチとしての実践を積み重ねていく必要がある。そこで、本研究では身近な課題として生活の中に存在するジェンダーの問題を中心に据えながらも、国際理解の視点を取り入れることで、児童の態度の変容を促し、社会的な公正の実現をめざす持続発展教育の促進に貢献したいと考える。

2. 研究の目的・方法

本研究は、次の2つを目的として実施する。まず、①2001年度に調査した児童・生徒の家庭での生活体験調査と同様の質問項目からなる質問紙を2009年度の児童・生徒に実施し、それら2つの結果を比較し、年度別及び男女別によって違いが見られるのかどうかを明らかにする。次に、②それらの結果から得られる課題を受けて題材を開発し、その効果を調べるために授業後の振り返りをもとに児童の変容を分析する。

本研究の調査対象者は、広島大学附属三原小学校及び附属中学校である。目的①の調査に関しては、2001年度と2009年度の小学6年生及び中学2年生のデータを用いた。表紙には生活体験調査アンケートと書かれており、学年と性別のみ記す無記名方式になっていた。回答方法は、1「まったくない」、2「2~3回ある」、3「時々ある」、4「よくある」の4件法で回答するようになっており、2001年度に調査したものと同様の20の質問項目からなる調査を行った。また、目的②の授業実践の部分では、目的①の課題分析を踏まえた家庭科の題材「家族とわたし」を開発し、2010年度の小学6年生で授業を行い、その効果について検証することとする。授業の効果の検証については、児童の授業後のふりかえりワークシートに記述されたことをもとに行う。なお、広島大学附属三原小学校・中学

校は、幼小中が連携する一貫教育の中にあり、カリキュラムは校種を超えて共同で開発している。その中で、家庭科では、小学校5年生から中学校3年生までの5年間の一貫カリキュラムを開発している。家庭科教科部会の掲げる2010年度の研究テーマは「自己の変容を促し、新たな生活を創る家庭科の学習」であり、カリキュラムの中でめざす子どもの姿は、「生活の中の課題に気づき、さまざまな他者とのかかわりの中で、新たな生活を創ることのできる子ども」であった。これは、持続発展教育がめざす「社会の課題と身近な暮らしを結びつけ、新たな価値観や行動を生み出す学習や活動」と同じ方向性のものであったと言える。

3. 成果と課題

3-1 生活体験調査の結果及び考察

表1は小学校6年生の家庭での生活体験の年度別及び男女別の比較を示したものである。表2は中学校2年生の家庭での生活体験の年度別及び男女別の比較を示したものである。

調査の結果、小学校6年生における2001年度と2009年度の比較では、「包丁を使ってジャガイモの皮をむく」、「リンゴの皮をむく」、「フライパンを使って調理する」、「お皿を手で洗う」、「ボタンを付ける」、「布の雑巾でふき掃除をする」の6項目の生活体験が有意に($P < 0.05$)低下していることが分かった。この結果から、例えば「食器洗浄機」など家電製品の進化や普及による生活の利便性の向上が、小学校6年生の「お皿を洗う」機会を奪っていることも考えられる。同様にジャガイモの皮をむく道具が、包丁からピーラーへと変化したり、布の雑巾が化学雑巾に変化したりするという社会の変化の影響が要因となっている可能性はある。また、小学生自身が塾や英会話教室などに行く時間が増えたなど、生活の変化の影響も原因としては考えられる。あるいは親の意識の変化なども要因として存在する可能性もある。これらの要因を探るためには、さらなる分析を必要とする。しかしながら、この結果からは小学校6年生の生活体験が確実に減少しているという実態が明らかになった。一方で、中学2年生の調査では、2001年度と2009年度で1項目を除いて有意差は見られなかった。変化が見られた項目は「洗濯物を干したことがありますか」の質問で、この項目のみが有意に($P < 0.05$)高くなっていた。逆に有意に下がっている項目はなかった。2001年度でも2009年度でも変わらず、親が中学生に対しては家事をある程度行わせているか、あるいは自立度が進む中学生では自ら進んで家事を行う結果であるのかは不明であるので、さらなる調査が必要となる。小学校6年生の男女

別による比較の結果では、9項目で有意差が見られ、いずれも男子の方が女子に比べて低かった。これは、社会的な影響などを受けて男子児童自身の家事への意識が低いこと、もしくは親が男子への家事を手伝わせる意識が低いこと、あるいはそれらが複合的に絡み合っていることなどが要因として考えられる。2009年度の中学校2年生の男女別による比較の結果では、小学校6年生を上回る14項目で、男子(42名)が女子(39名)より有意に低い数値($P < 0.05$)が示された。つまり、小学校から中学校へと移行するにつれて、男女の生活体験の差が広がっていることを調査の結果は示している。このことから、中学校家庭科へ接続する小学校高学年の時期に、家庭生活の中では男女関係なくお互いに助け合うことの大切さを確実に学ぶ必要性があると考えられる。そのために、ジェンダー教育の視点を意識したカリキュラム開発が重要になってくると考える。これらの生活体験調査の結果を総じて論じるならば、社会全体と社会の構成員一人ひとりの意識が課題となっていると言えるであろう。そこで、本研究では、社会の構成単位である家族の中の実践からこの課題に取り組むことをめざし、授業を開発することとする。家族が助け合って生活することの大切さ、男女の別なく平等に家事労働をすることの大切さに気づき、家庭で積極的に家事労働を行ったり、手伝ったりすることができる子どもを育てる授業が必要となると考えたからである。

授業を開発するにあたって、われわれが置かれている現在の日本社会では、家事労働についての意識はどのような状況にあるのかを調査した。文部科学省が日本、韓国、タイ、アメリカ、フランス、スウェーデンの6カ国の各国0歳~12歳までの子どもをもつ父親500人、母親500人を対象として実施した「家庭教育についての国際比較(2005)」の調査結果には、日本社会のもつ課題が述べられている。それによれば、日本は「子育ては母親、稼ぐのは父親」という考え方が強く、「長時間労働が父親の子育ての時間を短くさせている」という実態があることが指摘されている。この調査結果及び『男女共同参画統計データブック2006—日本の女性と男性—』(独立行政法人国立女性教育会館/伊藤陽一編, 2006)のデータを、題材の第2次で活用することとした。

3-2 授業の開発、実践と児童の変容

前述の結果から得られる課題を受けて題材を開発、実践し、さらに授業後の振り返りをもとに児童の変容を分析する。その中で、男女共同参画社会は世界でも共通の認識となりつつあることを扱うことで、現状を

表1 小学校6年生の生活体験の年度別及び男女別の比較

質問項目	2001年度と2009年度の比較			2009年男女別の比較		
		平均値(SD)	<i>t</i> 値		平均値(SD)	<i>t</i> 値
1. 米を洗ったことがありますか	2001	2.84(0.90)	0.18	女子	3.10(0.79)	-2.80**
	2009	2.87(0.79)		男子	2.61(0.73)	
2. 包丁でジャガイモの皮をむいたことがありますか	2001	2.34(1.09)	-4.35***	女子	1.72(0.89)	-0.80
	2009	1.64(0.88)		男子	1.56(0.88)	
3. ピーラーでじゃがいもの皮をむいたことがありますか	2001	2.75(1.06)	-0.75	女子	2.92(0.98)	-2.89**
	2009	2.63(0.97)		男子	2.31(0.86)	
4. リンゴの皮をむいたことがありますか	2001	2.62(1.18)	-3.24**	女子	2.31(1.15)	-2.46*
	2009	2.03(1.07)		男子	1.72(0.88)	
5. キュウリを切ったことがありますか	2001	2.95(0.96)	-1.20	女子	3.00(0.92)	-2.33*
	2009	2.76(0.96)		男子	2.50(0.94)	
6. フライパンを使って料理をしたことがありますか	2001	3.33(0.93)	-2.37*	女子	3.26(0.79)	-2.93**
	2009	2.97(0.91)		男子	2.67(0.96)	
7. なべをつかって料理をしたことがありますか	2001	2.50(1.18)	-1.64	女子	2.31(0.89)	-0.86
	2009	2.21(0.95)		男子	2.11(1.01)	
8. 手で食器を洗ったことがありますか	2001	3.25(0.88)	-2.35*	女子	3.15(0.81)	-2.48*
	2009	2.89(0.98)		男子	2.61(1.08)	
9. 栄養のバランスに気をつけて食事をしていますか	2001	2.95(0.88)	-0.19	女子	2.82(0.82)	1.00
	2009	2.92(0.90)		男子	3.03(0.97)	
10. 針と糸で何かをぬったことがありますか	2001	3.17(0.85)	-1.19	女子	3.23(0.74)	-2.34*
	2009	3.00(0.92)		男子	2.75(1.02)	
11. ボタン付けをしたことがありますか	2001	2.84(1.05)	-2.67**	女子	2.72(1.05)	-2.99**
	2009	2.39(1.05)		男子	2.03(0.94)	
12. ミシンを使ったことがありますか	2001	3.04(0.84)	-0.82	女子	3.03(0.78)	-1.12
	2009	2.93(0.74)		男子	2.83(0.70)	
13. 手洗いで靴下などを洗ったことがありますか	2001	2.08(1.14)	-0.49	女子	2.05(1.12)	-0.50
	2009	1.99(1.17)		男子	1.92(1.23)	
14. 洗濯機で洗濯をしたことがありますか	2001	2.14(1.09)	1.34	女子	2.49(1.12)	-0.80
	2009	2.39(1.13)		男子	2.28(1.14)	
15. 洗濯物を干したことがありますか	2001	2.59(1.07)	1.50	女子	2.92(0.96)	-0.78
	2009	2.84(0.96)		男子	2.75(0.97)	
16. 洗濯物をたたんだことがありますか	2001	2.96(1.00)	1.41	女子	3.28(0.79)	-1.16
	2009	3.17(0.84)		男子	3.06(0.89)	
17. アイロンがけをしたことがありますか	2001	2.43(1.07)	-0.97	女子	2.51(0.72)	-2.52*
	2009	2.28(0.86)		男子	2.03(0.94)	
18. 自分の机のまわりを整頓したことがありますか	2001	3.34(0.83)	-0.35	女子	3.33(0.77)	-0.41
	2009	3.29(0.88)		男子	3.25(1.00)	
19. 掃除機を使って掃除をしたことがありますか	2001	3.11(0.95)	-0.80	女子	2.90(0.82)	0.92
	2009	2.99(0.88)		男子	3.08(0.94)	
20. 布のぞうきんでふき掃除をしたことがありますか	2001	3.08(0.89)	-4.44***	女子	2.54(1.00)	-1.27
	2009	2.40(0.99)		男子	2.25(0.97)	

* : $P < 0.05$ ** : $P < 0.01$ *** : $P < 0.001$

(2001年 : $N = 76$ 2009年 : $N = 75$)

表 2：中学校 2 年生の生活体験の年度別及び男女別の比較

質問項目	2001 年と 2009 年の比較			2009 年男女別の比較		
		平均値 (SD)	<i>t</i> 値		平均値 (SD)	<i>t</i> 値
1. 米を洗ったことがありますか	2001	2.63 (0.88)	1.65	女子	3.19 (0.74)	-3.17**
	2009	2.86 (0.92)		男子	2.59 (0.93)	
2. 包丁でジャガイモの皮をむいたことがありますか	2001	1.88 (0.99)	1.66	女子	2.33 (0.95)	-2.17*
	2009	2.14 (0.92)		男子	1.89 (0.84)	
3. ピーラーでじゃがいもの皮をむいたことがありますか	2001	2.77 (0.99)	-1.95	女子	3.05 (0.73)	-3.42**
	2009	2.74 (0.85)		男子	2.43 (0.87)	
4. リンゴの皮をむいたことがありますか	2001	2.54 (1.12)	0.10	女子	2.90 (0.91)	-3.62**
	2009	2.56 (0.94)		男子	2.19 (0.84)	
5. キュウリを切ったことがありますか	2001	2.78 (0.96)	-0.20	女子	3.05 (0.76)	-3.74***
	2009	2.75 (0.86)		男子	2.38 (0.83)	
6. フライパンを使って料理をしたことがありますか	2001	2.90 (1.03)	1.23	女子	3.38 (0.66)	-3.30**
	2009	3.09 (0.81)		男子	2.84 (0.80)	
7. なべをつかって料理をしたことがありますか	2001	2.28 (1.20)	1.10	女子	2.81 (0.77)	-3.75***
	2009	2.47 (0.92)		男子	2.08 (0.95)	
8. 手で食器を洗ったことがありますか	2001	3.19 (0.91)	-0.66	女子	3.38 (0.79)	-3.35**
	2009	3.10 (0.87)		男子	2.76 (0.86)	
9. 栄養のバランスに気をつけて食事をしていますか	2001	2.51 (1.00)	1.96	女子	2.93 (0.84)	-0.99
	2009	2.81 (0.91)		男子	2.72 (1.00)	
10. 針と糸で何かをぬったことがありますか	2001	2.62 (0.97)	0.37	女子	3.00 (0.66)	-4.15***
	2009	2.67 (0.79)		男子	2.32 (0.78)	
11. ボタン付けをしたことがありますか	2001	2.19 (1.07)	0.36	女子	2.69 (0.68)	-5.76***
	2009	2.25 (0.84)		男子	1.76 (0.76)	
12. ミシンを使ったことがありますか	2001	2.45 (0.89)	-1.62	女子	2.51 (0.87)	-3.14**
	2009	2.23 (0.84)		男子	1.95 (0.70)	
13. 手洗いで靴下などを洗ったことがありますか	2001	1.81 (0.97)	1.91	女子	2.26 (0.91)	-1.59
	2009	2.10 (0.96)		男子	1.92 (1.01)	
14. 洗濯機で洗濯をしたことがありますか	2001	2.29 (1.13)	0.86	女子	2.62 (1.06)	-1.44
	2009	2.44 (1.07)		男子	2.27 (1.10)	
15. 洗濯物を干したことがありますか	2001	2.60 (1.10)	2.27*	女子	3.26 (0.78)	-3.23**
	2009	2.96 (0.89)		男子	2.65 (0.98)	
16. 洗濯物をたたんだことがありますか	2001	2.88 (1.03)	1.15	女子	3.38 (0.73)	-2.96**
	2009	3.10 (0.82)		男子	2.84 (0.83)	
17. アイロンがけをしたことがありますか	2001	2.53 (0.95)	-0.51	女子	2.93 (1.02)	-4.46***
	2009	2.44 (1.07)		男子	1.92 (0.89)	
18. 自分の机のまわりを整頓したことがありますか	2001	3.35 (0.82)	-0.11	女子	3.45 (0.63)	-1.27
	2009	3.35 (0.74)		男子	3.24 (0.83)	
19. 掃除機を使って掃除をしたことがありますか	2001	3.32 (0.85)	-1.18	女子	3.24 (0.69)	-1.87
	2009	3.09 (0.78)		男子	2.92 (0.83)	
20. 布のぞうきんでふき掃除をしたことがありますか	2001	2.77 (1.07)	-1.49	女子	2.55 (0.77)	-0.37
	2009	2.54 (0.84)		男子	2.24 (0.93)	

* : $P < 0.05$ ** : $P < 0.01$ *** : $P < 0.001$

(2001年 : N = 78 2009年 : N = 81)

取り巻く価値観よりもさらに広い視野で考えることの重要性に気付かせることができると考える。

以下、授業を実践した概要を述べる。

(1) 題材名 「家族とわたし」

(2) 対象児童 小学校6年生38名

(3) 本題材の目標

○家庭の仕事を男女の区別なく積極的に行おうとする意欲が高まる。

○家庭生活の中で適切なコミュニケーションをとり、仕事を自分で工夫してできるようになる。

○家庭生活の中で家族に役立つ仕事を選択して実践できるようにする。

○家庭生活の中で助け合いながら生活していく意味と意義に気付く。

(4) 題材時数 (総時数4時間)

○第1時 自立度をチェックしよう……………1時間

○第2次 自分の生活をふりかえろう……………2時間

○第3次 自分でできる仕事を考えよう……………1時間

(5) 活動の実際

○第1次 自立度をチェックしよう

自分がどのくらい自立しているのかを点数にして表し、クラスの平均点を算出した。例えば、「朝、起こされないで起きる」「自分の部屋の掃除をする」「家族の食事の片づけをする」など、児童の生活の15場面を想定し、簡単にできていると思われる問題から小学生ではなかなかできないであろう問題までを設定した。1「しない」、2「たまに」、3「だいたい」、4「いつも」の4段階にして算出した結果、クラスの平均点は37.0点となった。これらの結果を受けて、6年生の段階で、どの程度の自立が必要かを話し合った。すると、「食事を作り、片付けもできる」などの具体的な行動のほか、「親に言われてするのでなくその前に自分でする」「何でも自分の力でやる」などの抽象的な言葉も出た。

○第2次 自分の生活をふりかえろう

導入では、自分の生活をグラフに記入させ1日の生活をどのように過ごしているかを考えさせた。自分の生活時間を見直す中でそれらの中で家事の時間が非常に少ないことを問題だと感じる児童と、小学生だから家事にかかわる時間が少ないのは仕方がないと思える児童との差が明らかになった。次に、平日の男性の家事の時間が女性の9分の1であることを示すと、「不公平だ」「男の人でも家事をするべき」という意見が出た。一方で、「男の人は仕事の時間が長いから家事ができないのではないか」「男の人の方が仕事が大変だから家事の時間が少ないのは仕方ない」という意見も出た。そこで、国際比較によると日本の男性の仕事の

時間は最長で家事の時間は最短であることを示した。このように客観的な数値を見せると、児童は、「女性も男性と同じように働ける平等な社会がいい」「日本も外国と同じように男性の収入労働時間を減らすべきだ」などのより視野の広い意見が出るようになった。また、家族と過ごす時間も日本は、他国と比べて少ないことから、家族のコミュニケーションについて考え、コミュニケーションの取り方によって、家庭の仕事も円滑に行えるようになることを学んだ。

○第3次 自分でできる仕事を考えよう

授業の導入では、アジアのマンガを集めた「マンガジア」(名古屋国際センター・国際交流基金発行、2008年)より、「ジェンダー教育」として扱われている、中国、インド、韓国、フィリピンのマンガを使用した。まず、中国の4コママンガの最後のコマを空白にしたマンガを配り、その空白はどんな絵が入るのかを考えさせ描かせた。3コマ目までは、男女(夫婦)が全く同じように農作業を行っており、4コマ目は原作のマンガでは召し使いのように夫に食事を差し出す妻の絵を滑稽に描いている。多くの児童は、次の農作業シーンを予想したり、夫婦2人で楽しく食べたりしている絵を描いていた。答えを提示すると、「それはひどいよ」「女の人がかawaiiそうだよ」といった言葉が出て来た。次に、麻雀を楽しむ男性たちの隣の部屋で料理や洗濯、掃除に追われている女性を描いた中国のマンガ、女性がオフィスで書類を作成しながら同時に料理と子守りを行っているインドのマンガ、男性がテレビやカードなどの娯楽を楽しんでいる隣の部屋で、女性が料理をせっせと作ることに励む風景を描写した韓国のマンガ、右手で子どもを抱え左手で料理をし、右足で赤子をあやしながら左足でゴミ箱を開けている女性を滑稽に描いたフィリピンのマンガを見せた。これらのマンガに共通していることは、何かを考えさせた。すると児童からは「女の人が家事、男の人が楽をしている。」「男の人が女の人の苦労を気にしていない。」「家の中の仕事が不平等だ。」などの意見が出た。ここまで意見を交流したあと、「このマンガは、ちょっと偏っていると思う」との発言があり、「家事をたくさん手伝っている男の人だっている」「マンガはちょっと大げさ」などの意見が男子から出た。マンガなので、大袈裟に面白おかしく表現されていること、それから、女性からの視点だけでなく男性からの視点、例えば、前時に学習した男性の仕事の時間の多さなど社会的な問題なども原因にもなっておりジェンダー問題を多角的に捉える重要性に、これらの意見から気づいていった。このように意見を交流した後に、これまで見てきたマンガが日本のマンガではないことを初め

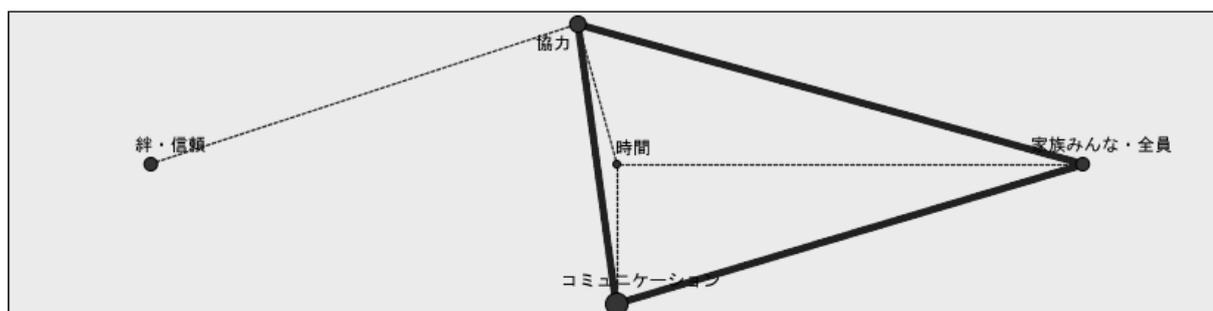


図1 「家族にとって大切なもの」のカテゴリ間関係

て明かした。そして、児童にどこの国かを予想させた。少し時間はかかったが、4つの国を言い当てることができた。と同時に、アジアのマンガが日本人にも理解できる、あるいは共通して考えることができるという事実を意外に感じたり驚いたりしている様子であった。ジェンダーについて学習していく上で、このように国境を越えて人間としての公正さを取り扱うことは、児童の視野を広げ、人間としての普遍性に気付かせることが重要であると考え。さらに「家族の中で何が大切だと考えるか」を考え、発表させた。最後に、これから「家庭の中で自分ができる仕事は何か」を考え、ワークシートに記述させた。

学習の最後に、これまでの学習をふりかえって、「授業を受ける前と後で自分の意識が変わったこと」を自由に記述させた。児童のワークシートには、「男女が平等に家事をしたり、働いたりすることの大切さに気づいた。」「自分ができることを少しでも増やして家族のためになるようにしたいと思いました。」「家の中の仕事で男女の差別をしてはいけない。」「家庭の中で、みんなが助け合うことが、やっぱり大切なんだなと思った。」「私は男の人が休みの日に家事をしてあげるとか、思いやりがある家族がいいと思いました。」「男の人でも女の人でも働いていいけど、家庭の中の仕事も助けあうことができるのが大切。」「男女がどちらも自立して共生できる社会になったらいい。」などのように書かれていた。このように、全員の記述の中に授業前と授業後で何らかの変容を読み取ることができた。

さらに、先ほどの「家族にとって大切なものは何だと思いますか」という質問項目に対して記述した回答をMicrosoft Excelに入力し、そのデータをIBM SPSS Text Analytics for Surveys 4.0に読み込み分析した。キーワードを整理・修正し、類義語などを1つにした上で、出現頻度5回以上の各キーワードについてカテゴリを作成し、webグラフのネットワークレイアウトを使ってカテゴリ間関係を見た。このような手続きで作成されたカテゴリは全部で5つとなり、コ

ミュネーション (20)、家族みんな・全員 (17)、協力 (10)、絆・信頼 (8)、時間 (5) であった。これらを家族にとっての大切なカテゴリとしてwebグラフで表示し、結びつきの強いカテゴリを探索したものが図1である。各カテゴリを示す丸が大きいほどそのカテゴリの回答者数が多い。また、カテゴリ間の位置や距離には特に意味はないが、線が太いほど共通回答が多く、結びつきが強いことを示している。「コミュニケーション」「家族みんな・全員」「協力」が太い線で示されていることから、家族にとって大切なものをこれらの3つのキーワードに関連付けて捉えていることが分かる。なお、男女別の記述内容には、大きな差は見られなかったことから、授業による効果は概ねあったと考える。

しかしながら、本研究には、児童が家庭の中での態度を変容させ家事の実践を行ったかどうか、あるいは継続的に家族で助け合う態度をもち続けているのかどうかは明らかになっていないという課題が残っている。持続可能な社会を形成していくためには、実践・行動の変化や変容した自己の継続が求められる。今後は、家庭での実践の記録を取らせたり、経時的な変化を調査したりするなどの手立てが必要であると考え。

引用 (参考) 文献

- 1) 五島敦子・関口和子編著 (2010). 未来をつくる教ESD—持続可能な多文化社会をめざして, 明石書店
- 2) 特定非営利活動法人NIED・国際理解教育センター (2008). 国際理解教育教材マンガアジア～アジアのマンガから世界を見よう, 財団法人名古屋国際センター
- 3) 独立行政法人国立女性教育会館／伊藤陽一編 (2006). 男女共同参画統計データブック2006—日本の女性と男性—, ぎょうせい
- 4) 牧野カツコ・渡辺秀樹・船橋恵子・中野洋恵編著 (2010). 国際比較にみる世界の家族と子育て, ミネルヴァ書房